

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 徐 冬 梅

論 文 題 目

中国映画スターをめぐる文化のグローバル化
——チャン・ツイイー章子怡のイメージ形成——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	藤木秀朗
委員	名古屋大学	教授	齋藤文俊
委員	名古屋大学	准教授	馬 然
委員	名古屋大学	准教授	星野幸代

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本論文は、中国出身の映画女優・章子怡^{チャン・ツイイー}を現代における文化のグローバル化を体現するスター現象の一つとして捉え、そのスターダム形成をイメージの生産、表象、流通、受容の各面から分析し、その過程にナショナル、リージョナル、グローバルな枠組みやアイデンティティがどのように絡み合っていたのかを明らかにしようとするものである。全体は、序章と終章を含め8章から成っている。

まず序章において、1979年生まれで1999年に映画デビューを果たし、その後国際的な名声を確立した章の経歴と出演作品を紹介しつつ、そのスターダムが越境的な特徴を備え現代のグローバル化現象と密接に結びついていることを本論文全体の展望として示している。続いて第1章では、章のスターダムを可能にした歴史的・社会的条件としての中国映画産業の動向を、2000年代に至るまでの中国政府の政治的・経済的・文化的政策、ハリウッド映画への対応、民間資金・外資の導入や合作映画・「賀歳片（正月映画）」などの製作・配給戦略に光を当てながら描き出している。

続く第2章から第5章では、章のスターダムの展開にとって起点となった4つの映画作品を中心に検証している。第2章では、1999年のデビュー作『初恋のきた道』を取り上げ、国際的に著名な張芸謀監督によるこの作品が世界の映画祭ネットワークに流通することで章のスターダムの礎が築かれたことと、章がそれまでの張作品に登場する女優よりも能動的な人物像を演じている点を論じている。第3章では、2000年製作の李安監督による合作映画『グリーン・ディスティニー』を組上に載せ、この作品が海外では芸術映画としてだけでなく娯楽映画として流通することで章がより大衆的な人気を獲得したこと、女性としての身体を生かしたカンフー的な身のこなしにより章の人物像に新たな魅力を加えたこと、その一方で中国国内では興行成績が伸びなかったことを考察している。第4章では、2002年に中国初の大作映画として製作された『HERO』に注目し、すでに国際的な名声を確立していた章が、中国のソフトパワー戦略に位置づけられていたと考えられるこの作品において、中国を世界へアピールする役割を担わされ、結果的に中国国内外で興行的に成功を収めた状況を詳らかにしている。第5章では、2005年製作のハリウッド映画『SAYURI』を取り上げ、この作品が日本文化の忠実な再現ではなく国際的に市場価値のある商品として製作されたという動機を踏まえながら、中国人である章がその国際的な知名度と舞踊の技能が優先されることで日本人役として表象された点を考察し、そこに彼女がナショナルなアイデンティティよりも汎アジア的なアイデンティティを担わされたことを読み解くと同時に、一方ではそれがナショナリスティックな反感を呼び起こした事態を明らかにしている。

第6章では、映画以外のメディアに目を向け、中国、中国語圏、アメリカ、日本の広告・雑誌などを分析しながら、それぞれの思惑に従って章のイメージがナショナル、リージョナル、グローバルなアイデンティティを担わされている状況を示している。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

近年、映像研究・文化研究においてスターの分析は重要な意義を持つものとして注目されている。それは、スターが単に映画作品中の役を演じる俳優だということに留まらず、政治的、経済的、文化的、歴史的なさまざまな要素が絡み合う一つの結節点として成立し展開する社会的な現象だと認識されるようになったからである。本論文は、そうした研究動向を踏まえつつ、中国映画女優・章子怡^{チャン・ツイイー}を、グローバル化を体現した一つの文化的産物の事例として捉え、その成立と展開の過程を明らかにするとともに、そこに見られるナショナル、リージョナル、グローバルな枠組みとアイデンティティの複雑な絡まり合いを分析することで、文化のグローバル化という現象の解明に貢献しようとする意欲的な研究である。

本論文の最大の功績は、中国映画スターをこうした多角的な面から総合的に考察したところにあるだろう。中国映画スターの研究は近年盛んに行われつつあるが、映画作品の表象分析に留まるものや、中国というナショナルな枠組みを無前提に中心に据えて考察するものが大半を占めている。また、章を論じた研究論文もいくつか発表されてはいるものの、一つないしは少数の出演作品に焦点を合わせ、スターダム全体を論じたものは皆無である。これに対して本論文は、4つの作品を中心的な事例としながらも、1990年代末から2000年代にかけての章の出演作品全体を見据えている。その上で、章のイメージが国境を越えて流通してきたという特徴に注目し、それが生産、表象、流通、受容の各次元で中国的なものとして意味を担わされたり、アジア的なものとして意味を担わされたり、あるいは国際的なものとして意味を担わされたりする状況と、そこに生じていた政治的、経済的、文化的な闘ぎ合いを浮き彫りにしている。とりわけ、この闘ぎ合いのあり方が『初恋のきた道』から『SAYURI』に至る出演作品において変容していることを具体的に示した点は、単に章のスターダムを明らかにするものとしてだけでなく、中国を一つの起点とした文化のグローバル化という現象がこの時期にどのように展開していたのかを示唆するものとして文化研究上、重要な意義を持つと言える。

加えて、第1章において1990年代から2000年代にかけての中国の映画産業の動向が中国政府の文化政策と併せて極めてわかりやすくまとめられている点も評価できる。

しかしながら、「ナショナル、リージョナル、グローバル」な枠組みを問題にする一方で、ときとして「国際的」と「中国的」という二項対立を軸に論じるなど一貫性に欠ける面がある点、「西洋的」「モダン」「リアル」「伝統的」「女らしさ」といった曖昧な言葉を根拠づけることなく多用している点など、論述にいくつかの問題が指摘できるのも確かである。とはいえ、これらは本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに相応しいものと判断した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	徐 冬 梅
試験担当者	主査	名古屋大学	教授	藤木 秀朗
	委員	名古屋大学	教授	齋藤 文俊
	委員	名古屋大学	准教授	馬 然
	委員	名古屋大学	准教授	星野 幸代
(試験の結果の要旨)				
<p>名古屋大学大学院文学研究科（課程博士）審査内規第5条および第6条にもとづき、平成25年11月18日午後4時より2時間にわたり、文学研究科130号室において試験担当者一同、申請者に面接し、論文内容および専門分野における研究能力について口頭試問を行った結果、申請者は合格と認められた。</p>				